

「東北地方の中小都市」のコンパクトシティ

～「東北地方の中小都市」における安全・安心、
快適で美しいコンパクトシティの形成を目指して～

(骨 子)

コンパクトシティ検討委員会

目 次

はじめに

1. 「東北地方の中小都市」の特性とコンパクトシティへの取り組みの必要性

2. 「東北地方の中小都市」におけるコンパクトシティ像

3. コンパクトシティの実現化方策

はじめに

提言書の主旨

人口減少、高齢化が加速する東北地方のまちづくりにおいては、財政上の課題、日常生活の安全や安心の確保、良好な都市景観の形成、雪対策への配慮などが求められている。

このような課題に対して、地域特有の自然環境や歴史文化を活かし、地方都市が今後も魅力的で持続性があり、誰もが豊かに暮らすことができる「安全・安心、快適で美しいコンパクトシティ」を実現するため、「東北地方コンパクトシティ検討委員会」において地方都市におけるコンパクトシティの基本的な考え方をとりまとめたものであり、今後のまちづくりの参考とするものである。

提言の対象都市

東北地方では今後、人口減少、高齢化等が急速に進むものと予測されている。特に中小規模の市町村ではこれらの傾向が著しく進展するものと危惧されていることから、これらの都市を対象としたコンパクトシティ像を構築して、持続可能な地方都市を実現する必要がある。

本提言書では、東北地方において最も多い都市規模であり、主に自律的な都市として人口減少等が顕著な人口3万人～10万人規模の「東北地方の中小都市」を対象としている。

1. 東北地方の中小都市の特性とコンパクトシティへの取り組みの必要性

東北地方の中小都市の特性

- ・東北地方は奥羽山脈などが縦走し、豊かな自然に恵まれている。
- ・面積の約8割が豪雪地帯に指定されており、多くの市町村の暮らしに雪が影響している。
- ・東北地方は広大な地域であるが、その中に、都市が分散して位置するため、都市間距離が長い。
- ・東北全域にDIDを持つ市町村が分散している。
- ・「東北地方の中小都市」は、人口規模が小さくとも広い通勤圏を有しており、地域の中心となっている。
- ・東北地方では、買回品の供給元として人口10万人以上の都市だけではカバーしきれず、「東北地方の中小都市」が、商業機能の拠点としての役割を果たしている。

市街地が拡大して都市において、これまで以上に人口減少、高齢化が進行すると・・・

東北地方の中小都市の将来動向

- ・中小規模の市町村では、約10%以上の人口減少が予測されている。
- ・東北地方は全国を上回る速度で高齢化が進み、2030年には3人に1人が高齢者となる。

中心市街地が衰退し、利便性が低下した都市になる

- ・中心市街地の居住人口の減少、都市機能の拡散がこれまで以上に進めば、地域を支える都市機能が維持できなくなり、地域全体の生活の質が低下する。さらに、長い歴史のなかで培ってきた地域の多様な文化や歴史などが消失し、中心市街地の魅力が一層低下する。

高齢者等に不便な都市になる

- ・高齢者の増加が著しい中小都市で、自動車利用の依存度が高まると、高齢者等の中小都市へのアクセスが悪化し、高齢者等にとって不便な街になる。

地域のコミュニティが衰退し、地域の活力が低下する

- ・全国を上回る速さで進む人口減少、少子高齢化は、地域づくりを支えてきたコミュニティの担い手不足や高齢化等を招き、地域の活力が衰退する恐れがある。

環境負荷の大きな都市になる

- ・中小都市は自動車依存度が高いが、このまま拡散した都市づくりを進めると、これまで以上に二酸化炭素の排出量が高まり、自然環境への付加が増大することが懸念される。
- ・郊外部の宅地化は、中小都市の資源である豊かな自然環境の荒廃につながり、地域の魅力・美しい地方都市の風景などが喪失していく恐れがある。

財政負担が大きな都市になる

- ・市街地が広がり、様々な公的サービスを提供する効率が下がることで、行財政への負担が悪化することが懸念される。特に、既存ストックの維持補修費や除排雪は市街地が広がることでより負担が増加する恐れがある。

2. 「東北地方の中小都市」におけるコンパクトシティ像

人口減少、少子高齢化が進むなかで、前述のような都市問題を軽減し、より豊かな都市を形成していくための一つの都市像として、次のような「東北地方の中小都市」のコンパクトシティ像が描ける。

コンパクトシティの理念

「東北地方の中小都市」のコンパクトシティは都市と農山漁村がこれまで培ってきた地域の生活を新しい仕組みで再生していく「街と里の暮らしが融合するコンパクトシティ」

高齢者を始め誰もが安全で安心な日常生活を過ごすことができるまちづくりを目指していく。

地域の固有の歴史・文化を継承し、賑わいと活力がある中小都市を目指して市民や関係者が取り組む。

コンパクトシティは、市街地と周辺緑農地が相互に依存し、豊かな自然環境や景観を維持、発展させる。

(コンパクトシティイメージ)

安全安心な暮らし (ほどよい暮らしができる都市)

アクセシビリティの確保 (誰もが安心して移動できる都市)

都市機能の適正配置 (賑わいと活力のある市街地が息づく都市)

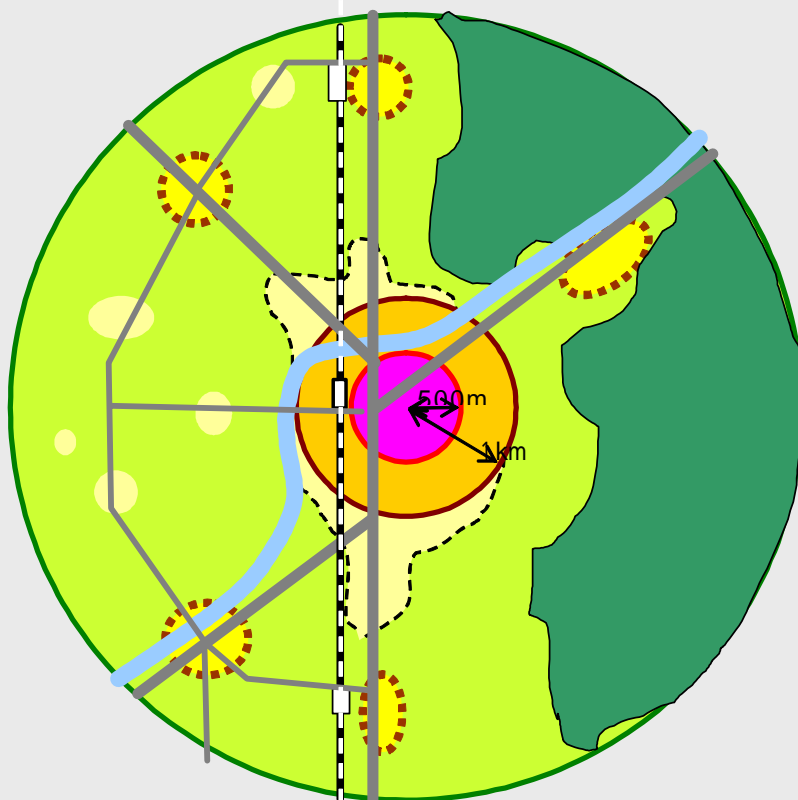
コミュニティの維持再生 (地域コミュニティや協働の取り組みにより支えられた都市)

土地利用のあり方 (農地や山林等の豊かな自然に縁取られた都市)

環境・景観に配慮した都市の形成 (環境負荷の少ない美しい都市)

都市経営 (地域の産業が育成され、効果的な都市経営が行われる都市)

コンパクトシティ イメージ図



凡 例	
● (pink)	街なかエリア
● (orange)	都市生活エリア
○ (dashed yellow)	郊外エリア
● (yellow)	集落エリア
● (light green)	田園地域
● (dark green)	山林地域

安全安心な暮らし（ほどよい暮らしができる都市）

「東北地方の中小都市」は、地域の産業を支え古くから根付いた集落や市街地を活かした、4つのエリアからなる都市構造が考えられる。

これらの地域においては、それぞれの地域特性等を活かし高齢者等の生活支援や居住のあり方、除排雪等のサービスレベルの違いを認識して、安全で安心した暮らしを確保していく。

	エリア特性
街なかエリア	半径 500mのヒューマンスケールな歩いて暮らせる街なかエリア 既存のストックを活かしつつ、街なかに住み・訪れる楽しみが得られる地域
都市生活エリア	半径 1kmで、街なかの都市的サービスが享受できる地域。自転車等による街なかへのアクセスが可能であるとともに、市民バス等による交通サービスが充実されている地域
郊外エリア	都市生活エリアの周辺に位置する地域で、団地住民の高齢化が進み、減少が加速される地域。
集落エリア	旧町村を単位とした地域の産業を支える古くからの集落拠点で、市民バスがある程度確保され、街なかとの連携が取れている地域

アクセシビリティの確保（誰もが安心して移動できる都市）

高齢化が加速的に進む「東北地方の中小都市」において、街なかエリアでは、自動車を利用しない人でも自由に移動でき、タウンモビリティや公共交通ネットワークが充実する必要がある。

特に交通の要衝となっている中小都市では、周辺町村部との広域的なネットワークエリア間のニーズに合わせた有機的な連携により、より快適な市民バス等の公共交通ネットワークとする。

また、街なかは直径1kmに収まる大きさであり、歩いて街なかを楽しむのにほどよい規模となっている。こうしたヒューマンスケールな街なかを楽しむため、雪にも強く緑豊かなゆとりのある歩道やポケットパーク、さらには高齢者や障害者など誰でも街なかを楽しめるようにタウンモビリティ等の交通サービスが提供されていることが必要である。

都市機能の適正配置（賑わいと活力のある市街地が息づく都市）

中小都市の街なかエリアでは、公共施設や診療所、銀行など多くの都市的サービスが配置され、市民が日常生活を過ごすことができ、より高次の都市機能は県庁所在都市等へ依存するものとする。

街なかエリアは、例えば日常的なサービスから週に1回程度訪れるような都市的サービスを提供し、普段から多くの市民が親しみ生活感あふれる中心市街地として賑わいと活力がある市街地を形成していくことが考えられる。

また、中心市街地は人が訪れるだけでなく、多くの人々が居住することで、中心市街地自体の活力を培うことが望まれる。中心市街地の特性を活かした多様なライフスタイルを提供することで、高齢者から若者まで多くの人々が暮らす中心市街地としていくものとする。

コミュニティの維持再生（地域コミュニティや協働の取り組みにより支えられた都市）

「東北地方の中小都市」は、旧町村時代の地域ごとに市街地や集落が形成されており、地域に根付いた身近なコミュニティなどが比較的残されており、さらなる充実が望まれる。このような「東北地方の中小都市」では、古くからのコミュニティと中心市街地活性化や除排雪などのNPO等との新しいコミュニティ等が重層的に地域を支え、協働のまちづくりを形成していくことで、持続的な都市となっていくことができる。

既に他の都市と農村の交流が図られている中小都市では、地域の文化、歴史や農産物等を介したコミュニティを拡大していくと共に、全ての都市で取り組んでいく。

土地利用のあり方（農地や山林等の豊かな自然に縁取られた都市）

「東北地方の中小都市」は、市街地拡大を抑制すると共に農地の保全を図っていく。

街なかエリア、都市生活エリアでは、高齢者等が住みよいまちづくりが実感できる土地利用の具体について計画を策定していく。集落エリアの田園や里山は、自然と調和した暮らしの場となっており、人口減少下にあっても都市住民やNPO等のコミュニティと協働して、これらの自然や農地を維持保全する仕組みを構築し、里山風景を保全する。

環境・景観に配慮した都市の形成（環境負荷の少ない美しい都市）

「東北地方の中小都市」は、歴史的まち並み、田園や果樹などの農村風景、里山風景など優れた景観に囲まれていることから、新たな都市施設においても考え方を踏襲していく。今後のまちづくりにおいては、資源循環、省エネルギーの視点にたった環境負荷の少ない都市を形成する。また、歩道の消融雪施設においては、地下水熱等自然エネルギーの他、ビル排熱の利活用を計画していく。

都市経営（地域の産業が育成され、効果的な都市経営が行われる都市）

人口減少や高齢化が全国を上回る速さで進展する「東北地方の中小都市」では、効率的な行政サービスを推進するため、住民参加による取り組みを進めるなど、行政コストの縮減を図っていく必要がある。

除排雪等の都市的サービスを維持していくためには、住民やNPO等との協働を進めると共にサービスエリアの縮小を計画的に推進するなど、地域ごとに取り組みを選択するシステムを進めていく。

さらに、地域産業や農産品の地域ブランド化が促進され、域外の都市や域内において消費され、交流が促進されるよう取り組んでいく。

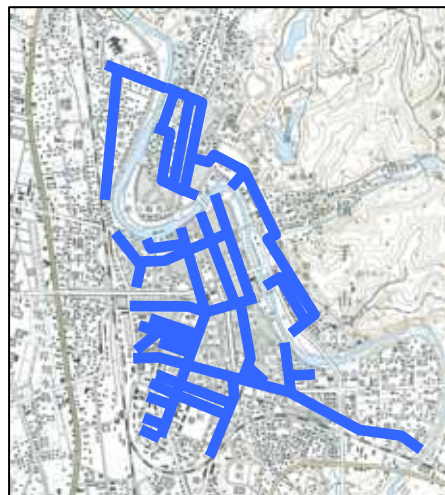
3. コンパクトシティの実現化方策

東北地方の中小都市のコンパクトシティを実現する方策について、各テーマごとに整理する。

安全安心な暮らし（ほどよい暮らしができる都市）

雪に強いまちづくり

効率的な除排雪に向けたまちなかでのまとまりある居住や、気候風土に強い居住の提供



中小都市におけるまちなか居住
都市の魅力・快適性を享受しながら住み続けられる中小都市でのまちなか居住の実施



多様な居住地にあった住まい方
周辺緑農地も含めた地域特性にあった豊かで多様なライフスタイルの提供



アクセシビリティの確保（誰もが安心して移動できる都市）

多様な交通手段の確保

自動車利用に偏りがちな地方都市において、子供から高齢者まで多くの人々が使える多様な交通手段の確保



移動の円滑化

まちなかでの回遊性を高め、まちを楽しめる歩行空間の確保。特に、冬期でも危険性が少なく、高齢者等でも円滑に移動できる歩行環境の創出



都市機能の適正配置（賑わいと活力のある市街地が息づく都市）

既存施設の活用と再配置

現在の都市施設の立地状況等を踏まえた、都市施設の活用と再配置



職住近接型のまちづくり

賑わいのある空間を創出する、まちなかでの雇用の場・快適な居住環境の創出



コミュニティの維持再生（地域コミュニティや協働の取り組みにより支えられた都市）

都市や農村部のコミュニティの活性化
農村が都市を取り巻く地方都市での、都市や農村部のコミュニティの活性化と連携

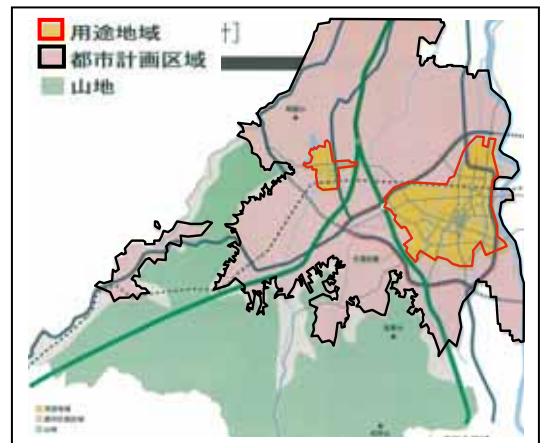


市民・行政・企業等の協働
持続的なまちづくりに向けた市民・行政・企業などの協働



土地利用のあり方（農地や山林等の豊かな自然に縁取られた都市）

市街地の拡大抑制
まとまりある市街地形成に向けた適切な土地利用のコントロールとまちなかの多様な市街地環境の形成



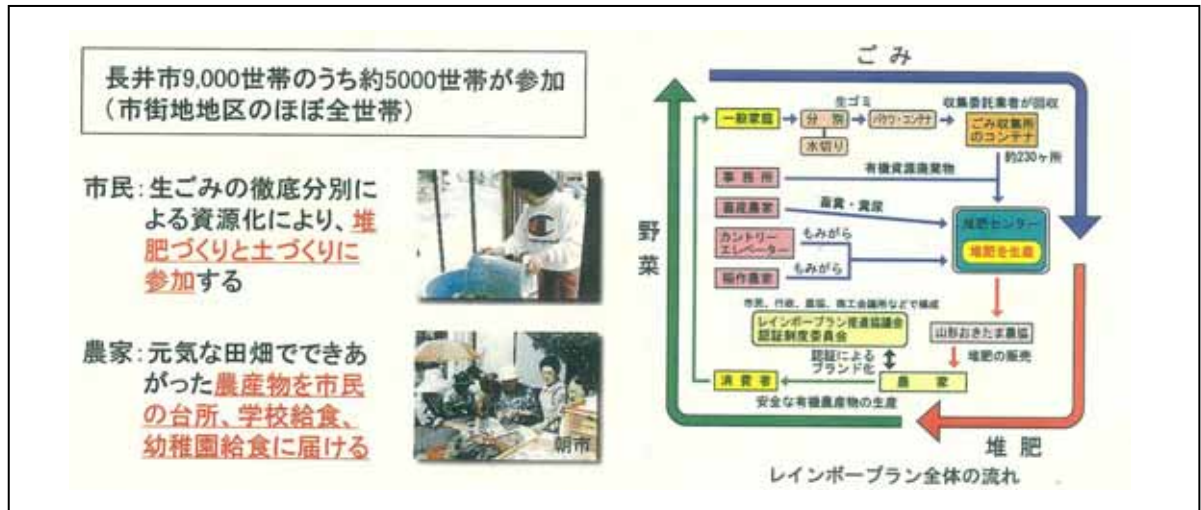
農地や自然環境の保全
市街地を取り囲む農地や自然を保全し、緑農地域と一体なった地方都市ならではの美しいまち・むらの形成



環境・景観に配慮した都市の形成（環境負荷の少ない美しい都市）

循環型の都市の形成

環境的に持続する都市を形成する、省エネ、ゼロエミッション、リサイクル等環境にやさしい都市の形成



都市経営（地域の産業が育成され、効果的な都市経営が行われる都市）

地域資源・産業の育成・経済的自律

地域資源・産業の育成をとおした地方都市の経済的な自律



公共公益施設のコスト縮減

新規の施設整備を縮小し、これまでのストックを有効に活用することで、経済的な負担を軽減する都市経営

